様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６４３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０３２４１

研究課題名（和文）発達障害傾向と親子の関係性の相互作用についての生後2年間の縦断的研究

研究課題名（英文）Longitudinal study on emergence of developmental disorder and mother-infant relationship from birth to two years olds.

研究代表者
池邨　清美（近藤清美）（Kondo-Ikemura, KIyomi）

帝京大学・文学部・教授

研究者番号：８０２０１９１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は，発達障害傾向，特に自閉症スペクトラム症（以下ASD）の発現と親子間のアタッチメント関係の関連を明らかにして，ASDの発現が養育にどのように影響されるのかを追究することを目指した。
　しかしながら，本研究では，研究開始の年に新型コロナウィルス・パンデミックが始まり，現在に至る３年間は感染予防のための行動制限が厳しく課せられ，研究の遂行がほとんどできなかった。そのため，本研究では，各分担研究者が行う小規模の研究や既成のデータの本研究の目的に沿った再分析を行った。その結果，ASDの発現と養育行動，アタッチメントの安定性との関係が明らかとなり，発達障害に関わる親子の関係性の重要性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は，臨床現場で問題とされてきたASD傾向と親子の関係性不全の関係を明らかにしようという野心的な試みであり，発達障害への早期の親子関係への介入の重要性を明らかにする研究として計画された。しかも，認知心理学や生理心理学，障害児心理学，臨床心理学といった様々な研究者が連携して多角的に研究するという点でユニークな研究であった。特に，ASDの発現が親子関係不全と関連するという古典的な知見について，現在の新しい障害観を基盤において，遺伝と環境のかかわりを見直す試みと言えるものであった。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this study was to examine relations between autism spectrum disorder (ASD) and mother-infant relationship. Our interest was whether parenting affects symptom of ASD.
However, owing to pandemics of COVIT-19 and its consequence, we suffered from movement restriction and could not reached to infant subjects because of mother’s fear of infection. So we couldn’t conduct the researches which we planed at the beginning. We conducted the small scaled studies and conducted re-analysis of the existing data.The results showed relations between ASD symptom, parenting, and attachment. The ASD symptom was affected by parenting according to intervention research. Attachment security which was affected by parenting corelated significantly not only social development but also language and communication skills. It can be said that parenting affects ASD symptoms and difficulty of social communication.

研究分野：発達心理学

キーワード：アタッチメント　発達障害　親子関係

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

発達障害児，特に，自閉症スペクトラム症（以下 ASD）児は近年，急増しているが，それに環境的要因が関わると指摘されている（Winstraub, 2011）。ASD は生まれつきの脳の機能障害とされているが，それが環境要因によって左右されるのであれば，予防や介入の余地があるわけであり，注目すべきである。その一方で，劣悪な環境下での施設養育児の研究（McCall et al., 2011）によると，子ども達にはアタッチメント障害だけでなく，ASD に類する特徴が顕著に見られたことがわかっている。また，近年，養育環境の脳の発達に及ぼす影響も注目されている（友田，2009）。つまり，近年の研究知見から，ASD は生まれつきで不変なものと考えるよりも，環境要因によって現れ方が異なる障害と見なされ，早期からの養育を含めた環境への介入が重要であると考えらえるようになってきた。また，ASD の早期兆候は，ホームビデオやきょうだい児の研究から生後 1 年以内に目の動きや人への興味に表れることがわかってきた（Yirmiya & Charman, 2010）。つまり，この点でも，ASD への早期発見と早期介入の重要性が示され，生後初期からの研究が求められているわけである。

さらに，近年，ASD は，スペクトラム障害ととらえられ，通常発達と連続する障害と考えられるようになった（APA, 2013）。また，わが国における調査でも，通常クラスの中に発達障害と見なしうる児童・生徒が 6.5%程度いると言われている（文部科学省，2012）。したがって，障害の診断を受けるのを待つだけでなく，通常発達をしている子ども達の中にも発達障害の傾向をもつ者がいるとして，一般の子どもたちを対象に早期から縦断研究を行うことにより，この問題に取り組むことが重要といえる。

２．研究の目的

本研究は，近年の ASD の研究動向に依拠して，ASD やその傾向が，環境的要因，とりわけ，養育という社会的要因との相互作用でどのように現れ方が異なるかを明らかにするものである。特に，ASD に特徴的にみられる社会的認知の問題や睡眠，栄養摂取の不全といった生物学的要因に起因する問題が，親子のアタッチメント関係とどのように関わるかを明らかにする。

３．研究の方法

当初予定していた研究は，出生直後より研究対象者を縦断的に追究する研究計画であり，定期的な質問紙研究と研究室に来所をして所定の実験や行動観察を行うものであった。その中で，社会・コミュニケーションの発達と親子の関係性の評価を行うことを計画していた。

ところが，本研究計画に着手した年に始まった新型コロナウィルス・パンデミックにより，行動制限が激しく課せられ，特に，感染への恐れから乳幼児の研究対象者にアクセスすることが実際上，不可能になり，研究計画の大幅な見直しがなされた。そのため，本研究チームが一つのプロジェクトを実施するのではなく，各研究グループでできることから小研究を実施する方式に切り替えられた。また，研究対象者の年齢幅を広げ，縦断的研究をあきらめることにした。それとともに，各研究者が持っているデータを発掘して本研究目的に則した分析を行うことで新たな知見を得ることにした。特に，ASD の評価やわが国でのアタッチメントの評価について精査を行うことで，本研究テーマに近づく方法論の確立を目指した。

４．研究成果

新型コロナウィルス･パンデミックにより研究実施は著しく制限され，研究成果は以下の通り，非常に限定されたものとなった。

１）ASD の専門家グループによる研究成果

ASD の支援を専門とする研究者を中心に，低年齢における ASD の行動観察による評価の重要性が明らかにされた。また，親子の関係性に介入する支援方法の効果研究を行う中から，ASD の症状発現にかかわる養育行動の重要性が指摘された。その養育行動への介入では，必ずしもアタッチメント研究の成果に依拠していないが，親子で気持ちを通い合わせて遊ぶことや親が子どもの気持ちを汲み取りながら関わることの重要性が指摘され，安定したアタッチメント形成に関わる要因が取り上げられた。

２）アタッチメント研究グループによる研究成果

我が国のアタッチメントの評価方法にはかねてからの疑義があり，わが国では妥当性がないと言われていた。そこで，これまでのデータを再分析することで，乳幼児期のアタッチメントの評価方法として国際的に使われているストレンジ・シチュエーション法の妥当性を証明することができた。今後のアタッチメントを調べる研究では，ストレンジ・シチュエーション法を標準として使う重要性が明らかになったと言えよう。

アタッチメントが不安定な子どもでは後の社会性が問題となるという知見は欧米で出されているが，この点についても分析を行ったところ，不安定なアタッチメントをもつ子どもは，安定したアタッチメントをもつ子どもよりも，社会的発達に遅れがあるだけでなく，言語・コミュニケーションにも遅れが見られた。しかしながら，その長期的影響はすぐに消えるが，６歳児になっても同時的にはアタッチメントと社会・コミュニケーションの発達が密接に関係していることが分かった。この理由についてはさらに精査が必要であるが，親子の関係性不全が社会性だけ

でなく言語・コミュニケーションにも影響するというところで，特筆するべきである。ASD をもたらす脳の機能不全が直接的に社会・コミュニケーションの障害をもたらすというよりも，親子の関係性を阻害することで，これらの問題をもたらす可能性があるとも言えるものである。

３）その他の研究グループによる研究成果

生理的指標として重要な睡眠に注目した研究がなされ，子どもの睡眠状態は子どもの生理的状態によるだけでなく，親の状態や養育の在り方が関係することが分かった。つまり，子どもの発達の生物学的側面に親の養育が密接に関わることが示されたわけである。

以上の研究成果から，発達障害を始めとする子どもの問題について，生まれつきの脳の機能障害としてとらえるのではなく，環境との相互作用を見据え，親の養育や親子の関係性から見直す重要性が明らかにされた。また，介入では，親子の関係性をターゲットとして支援計画を考える必要性が明らかになった。今回の研究は，非常に不十分なものであるため，今後，このテーマについてさらなる研究が行われることが期待される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 T.Forslund, P.Granqvist, M.H.van IJzendoornm～ K.Kondo-Ikemura, ～他66名	４．巻 24-1
２．論文標題 Attachment goes to court: child protection and custody issues	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Attachment & Human Development	６．最初と最後の頁 1-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 近藤清美	４．巻 67
２．論文標題 我が国のアタッチメント理論をめぐる問題	５．発行年 2020年
３．雑誌名 青少年問題	６．最初と最後の頁 2－9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤清美	４．巻 68
２．論文標題 アタッチメント理論の我が国への適用	５．発行年 2020年
３．雑誌名 教育と医学	６．最初と最後の頁 12－20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 黒田美保	４．巻 11
２．論文標題 コミュニティーでの支援を実現するJASPERプログラム	５．発行年 2020年
３．雑誌名 子どものこころと脳の発達	６．最初と最後の頁 28－34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 黒田美保	4．巻 21
2．論文標題 自閉スペクトラム症への早期支援の最前線．子どもの健康科学	5．発行年 2020年
3．雑誌名 子どもの健康科学	6．最初と最後の頁 59－62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 近藤清美	4．巻 28
2．論文標題 幼児期以降の子どもの育ちと親子のつながり	5．発行年 2019年
3．雑誌名 乳幼児医学・心理学研究	6．最初と最後の頁 73-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 近藤清美	4．巻 68
2．論文標題 アタッチメント理論のわが国への適用	5．発行年 2020年
3．雑誌名 教育と医学	6．最初と最後の頁 12-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤直子，稲田尚子，中島俊，大井瞳，井上真里，宮崎友里，& 足達淑子．	4．巻 71
2．論文標題 就学前幼児の母親の抑うつと母子の睡眠との関連．	5．発行年 2022年
3．雑誌名 保健医療科学	6．最初と最後の頁 432-439
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　1件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 K. Kondo-Ikemura,& K.Y.. Behrens
２．発表標題 The Japanese mothers’ ”Amae” narative in the Adult Attachment Interview
３．学会等名 International Attachment Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 近藤清美
２．発表標題 6歳児における母子分離再会時の不安定なアタッチメントに特徴的な行動
３．学会等名 日本子育て学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 木原久美子・山口沙喜
２．発表標題 読み聞かせと描画を通して幼児がイメージする絵本の世界
３．学会等名 日本発達心理学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 近藤清美
２．発表標題 1歳児のアタッチメントとその後の発達との関連
３．学会等名 日本発達心理学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 近藤清美
２．発表標題 高機能自閉スペクトラム症者の心理的不適応の問題を考える ーアタッチメントの視点からー
３．学会等名 日本発達心理学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kiyomi Kondo-Ikemura ＆Kazuko Behrens
２．発表標題 Does Japanese mothers’ attachment security affect their evaluation of their children’s developmental skills?
３．学会等名 Society for researches in child development（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 近藤清美
２．発表標題 発達障害の子どもへの発達支援―アタッチメント理論から
３．学会等名 日本カウンセリング学会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kazuko Y. Behrens ＆K. Kondo-Ikemura
２．発表標題 Stability of attachment from infancy to middle school attachment: First cross-modal assessment of continuity of attachment security in Japan
３．学会等名 International Attachment Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 近藤清美
２．発表標題 わが国におけるストレンジ・シチュエーション法はアタッチメントの評価方法としての妥当性があるのか？
３．学会等名 日本発達心理学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Kazuko Y. Behrens &K. Kondo-Ikemura
２．発表標題 First Q-sort based sensitivity measure in the context of attachment in Japan.
３．学会等名 Society for researches in child development（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 K.Kondo-Ikemura &Kazuko Y. Behrens
２．発表標題 Middle childfood attachment in Japan: Correlations between 6-years-olds’ attachment behaviors and developmental skills
３．学会等名 Society for researches in child development（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中島　俊 (Nakajima Shun) (10617971)	国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・認知行動療法センター・室長 (82611)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	早川　友恵 (Hayakawa Tomoe) (60238087)	帝京大学・文学部・教授 (32643)	
研究分担者	稲田　尚子 (Inada Naoko) (60466216)	帝京大学・文学部・講師 (32643)	
研究分担者	木原　久美子 (Kihara KUmiko) (70266279)	帝京大学・文学部・教授 (32643)	
研究分担者	稲垣　綾子 (Inagai Ayako) (70823178)	帝京大学・文学部・講師 (32643)	
研究分担者	實吉　綾子 (Saneyoshi Ayako) (90459389)	帝京大学・文学部・准教授 (32643)	
研究分担者	笠井　さつき (Kasai Satsuki) (70297167)	帝京大学・付置研究所・教授 (32643)	
研究分担者	黒田　美保 (Kuroda Miho) (10536212)	帝京大学・文学部・教授 (32643)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関